
ファンタシースターポータブル2i~異世界の5人~

サイクロン&ハリケーン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ファンタジースター・ポータブル2～異世界の5人～

【Zコード】

N4736Z

【作者名】

サイクロン&ハリケーン

【あらすじ】

それは遠い星のお話。軍事会社リトルウイングにルーク・フィレンという青年がいた。彼は亜空間事件を解決した英雄である。

そして欠片事件から半年後がたつたある日、何やら怪しい5人がある会話をしている。彼等は何者なのか、まだ知るのは先の事であった。

リトルウイングを飛び出したルークは、ルークの妹、弟に3年ぶりに再会する。そしてルークは自分の本名である、ディオ・ルタ・

オルテガとして、生きることに決めた。そして、ディオンと話をしてる途中にソロから通信が入る。その内容はグラールに関する事だつた

プロローグ・謎の5人（前書き）

初投稿です。自信がないですが、どうぞ御覧ください（ちなみに主人公はまだ出ません）。

プロローグ・謎の5人

- ?「「」は、どこだ？」
- ?2「どうやら成功したみたいだね。」
- ?3「ああ、そのようだな。」
- ?「失敗するかと思ったが・・・・、何もなくて良かつた。」
- ?4「失敗するわけないッスよ。俺が造ったんッスよ」
- ?5「その様なしゃべり方だから、そう言われるんだ。」
- ?2「でも、彼の腕はたしかだよ？」
- ?4「良い」と言つてくれるじゃないッスか。」
- ?「そんなことより、本当に大丈夫なのか？」
- ?5「ああ、大丈夫だ。準備はできてる。俺達の目的を達成させよう。」
- ?3「ふつふつふ、そうか。」
- ?3「時間もないし、もう行こうぜ。」

? 2 「 そ う だ ね 」

? 5 「 ま で よ 、 先 々 行 く の は 良 く な い 、 そ う だ な ま ず は ・ ・ ・ 。

プロローグ・謎の5人（後書き）

うーん、とりあえずここまでですね。誤字、脱字がありましたら、教えてください。

第一話・依頼 1（前書き）

続けて投稿です。前回は会話だけだった。でも後悔はしてないよう
なあらう。まあ前回は気にせず御覧ください。

「マイルーム」

こここの部屋に1人の青年がいた。彼の名はルーク・フィレン、亜空間事件を解決した英雄である。だが、今は彼はベッドで寝ている。病氣出もなく怪我したわけではない。彼に取つて久しぶりの休日になる・・・はずだつた。

コンコン

「はい。」

「ルーク? いる?」

「(うるさいのが来たな) ああ
扉が開き姿を見せたのはエミリアだつた。

「何よ、その返事は?」

「別に(言つたら殺される) で、何のようだ?」

「うーん、実はさ。あんたにお願いしたい事があるの」

「なんだ?」

「実はナギサに声をかけたんだけど、依頼が入つていけなくなつた

んだ。」

「んで？」

「だから、あんたに来てもらいたいんだ」

「ビーハー？」

「依頼」

「依頼？・・・悪いが、今日は俺は休・・・」

「お父さんに声を掛けたら、ルークと行けと言われた」

「おいおい・・・」

「ルーク・・・お願ひ

少し考えて、ため息を付き

「わかつたよ。付いて行けばいいんだろ？」

と答えるミリアが笑顔で

「ありがとう」と答えた。

「やれやれ」と言しながらベッドから出でる。

「依頼内容は？」とミコアに聞く。

「うーん、何かパルムで不審な5人を見たんだって。」

「その5人を何者か調べろと。」

「そう、その通り」

「やつれど終わらせよつ。せつかべの休日なのに仕事するなんて」

「ぶつぶつ言わないの。はやくこ」

「やれやれ」呟きながら、部屋を出た。

第一話・依頼 1（後書き）

やつぱり小説は難しいですね。でも頑張ります。
・・・うん、頑張る

第一話・依頼2（前書き）

少し編集しました。

ルーク「編集して、余計変になつたんじゃないのか？」

そ、そんなことないわ・・・。

第一話・依頼2

「パルム草原」

依頼を受けたエミコアと無理やり依頼を受けさせられたルークがいた。

「エミリア？ここに依頼にあつた不審な5人を見た場所か？」

「うん。 そうだけど、誰もいないね？」

「だが、油断はするなよ。 いきなり襲つて来るときもあるからな。」

つとエミコアに注意を促した。

「わかった」 つと返事をするエミリア。

「とりあえず、辺りに誰かいいか、 捜索するか。」

「そうだね、まずは人を探さな・・・」

「……？エミリア！ 伏せろ……」 と叫ぶルーク。

「え？」

「ちっ」とエミコアを無理やり右に押す。

「痛つ」と地面に尻餅をついたエミコアが声を出す。

「へそ、どにからだ」辺りを見渡すルーク。つとそじ。。

「あ～あ、外しちゃった。結構自信あつたんだけどな～～。」つと声がした。

「誰だ～～」つと声がした方向に声を出した。

「普通、自分がからで乗るものでしょ～～？礼儀をしらないの～～？」

「なに？」

「いたたたつ」お尻を擦りながら立ち上がるエミコア。

「大丈夫か。エミコア？」

「人を押し倒しといて、その台詞言つかな？まあ大丈夫だけじ。」

「わりい、その方法しかなかつたから。」

「いやいや、その他にも方法があるしょ～～？」

などの会話をしていると、

「何？漫才でもやつてるの～～？あんまり面白くないよ～～

「姿を見せないお前に言われたくない。つていうか漫才なんてしてない」と声がする方向に喋る。がしかし、

「どに見て喋つてるの～～、後ろだよ～～。君の後ろ～～

「「……!?」」と振り向く2人。

「こいつからそこそこ?」つと、ルークが質問をする。

「『お前に言われたくない』って辺りかなあ~~?」

「ううう、何かしゃべり方が腹が立つ。」つとエミリアが言つ。

「あははは、いい慣れてるから、痛くも痒くもないよ~~。どう?
余計に腹が立つたでしょ~~?」

「それより、どうやって後ろに?」ルークが質問をする。

「あまり腹が立たなかつたみたいだね~~、まあ、いいや。それより
答えないとね~~、君の質問に?。簡単だよ~~。僕ちんの特殊能力だ
よ~~。」

「特殊能力?」

「特殊能力って言つても、ピンと来ないと思うよ~~。まあ、さうで
簡単に言つとね~~、・・・・・僕は普通の人間じゃあないんだよ。」

言い方が少し悲しそうに話す。

「えつ?」

「でも・・・・・、どうでもいいことだよねえ~。おつと忘れるところだつたよ~~。」つと、何かを思い出したかのよう、背筋を伸ばして喋る・・・・・が。

「実はさ～、君達にお願いがあるんだ～」全く礼儀のない言い方でルークに言つ。

「誰がお前のお願いを聞くもんか。」つと、そつ答えるルークに。

「ほんと。襲撃しといてなによ、それ？しかも、礼儀がまったくないし」

「Hミリアもそつ答える。

「困つている人を助ける仕事なんでしょう～？助けてよ～。子供だよ？僕ちん

「子供も大人も関係ない。襲撃した理由を聞き出してやる。つていうか自分からいうか？」『子供だよ？』つて、つと言いながら、シップウジンライを構える。

「子供だから、子供つて言つただけだよ～。それよりなに～？子供に武器使うの～？大人げないなよ～？ま、武器使つても君は勝てないけどね～」

「つと言いながらゼロセイバーを構える。

「Hミリアーーー下がつてろーーー！」

「ルーク、あたしも戦つよ」

「パートナーの話の事聞くもんだよ～。って君が戦つても足手まとことなると思つよ～。」

「と笑いながら囁く。

「ううさい、あんたに聞いて・・・」

「ヒミリア。下がってる・・・大丈夫、そう簡単にやられないさ。

「と真剣な顔でエミリアに囁く。ヒミリアも観念したのか、

「わかった。」と、答えた。

「せひと、準備はいいか?」と子供に囁く。

「僕らは、いつでもいいよ～。あ、そういへ、僕らの名前はミケ。ミケ・ラン・ジャーダン」

そしてミケはルークに飛び掛かる。

第一話・依頼2（後書き）

とつあえず、ここまで。

ルーク「やつぱり、内容が」

誤字、脱字がありましたら教えてください。

ルーク「無視するなよ」

第一話・依頼3（前書き）

初戦闘シーンです。

ルーク「俺の出番が多くなるわけだ（内容は心配だけ）」

では、どうぞ

第一話・依頼 3

「ふつ、遅いな」つといきなり飛び掛かるミケに対し、右側に避け、ミケに攻撃の体勢をしようとした時、

「君がね～」つと言った瞬間、地面に左手を付き、左手をグイッと地面を押し飛び上がり、ゼロセイバーをしまい、インフィニットブラスターを構え、ルークに射つ。

「！～！」

攻撃の体勢に入っていたせいか、顔を左に避ける事しか出来ず、2つの弾の内、一発頬にされた。そして、そのすぐれた所から血が出てきた。

「ルーク！！」つと叫んだエミリアが戦いに加わろうとしたが、

「下がつてろつていただろ！！」つとルークが叫ぶ。

「あんな奴、1人で戦おうなんて、言う方がおかしいよ！！」

「あははは、仲間割れしてる～～」つと地面に着地していたミケが、いつの間にかインフィニットブラスターをしまい、ゼロセイバーを回しながら、嘲笑う。

「ちっ、調子に乗りやがって」

「ルーク！！」

「……。分かったよ、だが、無理だけするな

「あんたも、無理はしないでよ

「ああ、分かった

「あちやー、2対1になっちゃったー。でもねー、僕ちゃんはねー、2対1でも勝てるんだよねー。」ゼロセイバーを回しながら囁く。

「その自信、いつまで続くと思つたよ

「パートナーに『トガつて』つといった奴がそのセリフって……・あははは、変なのー。」

「お蝶りは、ここまでだ」とミケに睨み付け、シップウジンライをしまい、アカツキ・印を持ち、ミケに向ける。

「あたし達をあまりなめないで」クラーリタ・ヴィサス?を持つHミリア。

「別になめてないけどなー、」つとまだ嘲笑つてゐるのか、ゼロセイバーを回してゐる。

「その言い方とその態度が腹が立つつての。」Hミリアが言つ。

「あつ、そりなんだー、だつたらねえー」つとゼロセイバーを回すのをやめ、

皿をつぶぬけ。そして・・・・ゆつづを開け・・・

「・・・・、普通に喋ればいいんだね」つと言い、ゼロセイバーをしまい、何やら構えをとり、そして・・・・。

「じゃあ、戦うことも普通にいかせてもらつよ。もつ手加減なしだみーー本氣でいくからねーー」つと言つた瞬間体が光始めた。

「「.....」

2人が驚く。

2人の前に姿を表したのは、暴走中のナノブラストの姿であつた。

「ばつ、バカな」つと驚くルーク

「嘘でしょつー?何でヒューマンがナノブラストができるのよーー。つと叫ぶミリア。

(言ふに忘れましたが、ミケはヒューマンです)

「言つたはずだよ、僕は普通の人間じゃあないつて、あと一つ言つとくけど、僕のナノブラストは時間制限はない。僕のナノブラストを止めることが出来るのは

「お前を倒す事だ。」

「そのとおり。それと、自分の意思でも止めることも出来るんだ。さてと、お喋りは終わりだったね。じゃあ望み通り終わらしてあげるよ。君達が死ぬことで。」つとルークに飛び掛かりあつという間

にルークの目の前に来ていた。

「！？（速い）！」「と思つたルークだが、
ドン！－

腹に蹴りを入れられ、吹つ飛ぶルーク。

「グツ！－！」ルークが飛ばされる。

しかし、凄いスピードでルークに追いついたミケがルークを踏み台にするかのように、おもいつきり腹を踏む。そしてルークが地面に叩きつかれる。

「ぐ、ぐはあッ！－！」地面に叩きつかれたと同時に口から血を出す。

「ルーク！－！」と近寄るが、

「・・・・・終わりだ、ルーク・・・・・」と言い残しルーク止めを指そうとしたが、。

・・・・。

「言つたろ？お喋りは終わりだつて。」とニヤリと笑つたルーク。

「ぱつ！－！」つどびっくりしたミケ。その訳は・・・・・ルークがアカツキ・印で攻撃を防いでいたのだ。

「バカな、なぜ攻撃を防げられたんだ。君は完全に万事休すだつたはず！」 つと焦るミケ。

「俺がいつ万事休すに追い詰められたつと言つた？」 つとそれを答え
るルーク。

「まあ、お前の攻撃を耐えられたのは亞空間事件を乗り越えたおかげかな。いやー、結構、力が付いたもんな」 つと今度はルーク
がミケ言い方だつた言い方でミケを嘲笑う。

「ふざけ・・・ん？ 亞空間事件？ ああ、やっぱりそうか。君、亞
空間事件を解決し、グラールを救つた英雄、ルーク・フィレンか。」

「！」名答。まつ、英雄は余計だかな。

つと答えるルーク。

「しかし、例え英雄でも、あの攻撃を食らつたら誰だつて・・・」

「悪いが、あんな攻撃、何回も食らつたらからね。まつ、慣れちゃ
つたつてやつ？」 つとまた嘲笑うルーク

「くそ、なめがつて。どうせ急所を外したにちがいない」 つと言つ
たミケだが・・・

「ふつ、どうやら、俺たちの勝ちみたいだな。」 つと言つルーク。

「えつ？」 つと呆氣ない言葉で言つミケ。そして、

「...」

何かを察知したミケだが、気付くのが遅く何かにぶつかり、遠くに吹つ飛ぶミケ。それはエミリアが放つたミラージュブラスト、コンル（氷刃ノ疾風）だった。

遠くに飛ばされた先には、大きな木が一本立つてあり、その勢いのまま、ミケは木に叩き付かれた。

バツキィイイイ～ツ

つと木が折れた音がし、勢いが強かつたせいか、そのまま木を通り越し、折れた木を少し離れた所で、地面に落ちた。

「ふう～～。・・・・・（・・・・・終わったかのか？）」つと警戒をルークは息を吐く。

「ルーク！！大丈夫？」

「ああ、何とか。しかし、エミリア？なぜブラストがたまつてたんだ？」

「ああ、それ？実はバスクからもらつたのを食べただ～。これだよ。」

「ん？そのクッキーみたいなやつ？」

「そうだよ、これ美味しいんだよ～。」

「まあ戦闘中に食べるのはどうかしてるが、とにかく助かつたよ。ありがとな、エミリア。」つとエミリアにお礼をするルーク。

「最初の言葉が気になるけど、まあいいか。」 つと笑うエミコア。

「ふふふ」 つとひらひられて笑うルーク。

「あ、それよりルーク？ あいつどうする？」 つとルークに聞く。

「そのままにしておけば、あれだしな。とりあえず連れて帰るか。」

「え？？」 つとエミリアが言つた時、

「くつ」

「く…く…」

「ま…まだ…まだ…僕は…まだ…負け…てない」 かなりフラフラなりながら立つミケ。あまり力が無いのかナノブラストの状態ではない。

「く…く…」

そのミケを見たルークとエミリアがそれぞれ違う反応した。

「やれやれ」 つとルーク

「あれだけ、やられておいてまだ立つかな？」 つとエミコア

「ああ、ここ」 つと叫びミケだったが、その時。

? 「あつ、見つけたぞ、ミケ。」

? 2 「あの野郎、またやりやがったな。」

「 「...」」

その声に驚いたルークとエミリアは、声がしたほうを見た。そこには、2人が歩いてくる。1人はミケと同じヒューマンで18~19歳ぐらいの背の高い青年。もう1人はデューマンで15~16歳ぐらいのなかなか背の高い少年がやって來た。

第一話・依頼3（後書き）

誤字、脱

ルーク「ちょっと、いいか（怒）」

あれ？ 何で、怒つ

ルーク「ミラージュブラスト！…！」

ぎや～～～～。

ヒミコア「誤字、脱字があつたら教えてね」

そ・・・・・それ・・・・・俺の・・・・・セリフ・・・・

第一話・依頼4（前書き）

何回も読み直したから多分大丈夫です。

つと直つておきながら、少し訂正しました。

ルーク「また、訂正するんじゃないか？」

そ、そんな事はない、・・・つん。

ルーク「はあ～～」

第一話・依頼4

18～19歳ぐらいのヒューマンの青年が、ルークとエミリアに近づく。

？「すいません、僕の弟が迷惑をかけましたか？」

？2「兄貴、ミケのあの姿とこの2人の疲れ具合を見る限り、迷惑をかけたに決まってるだろ？」

15～16歳ぐらいのヒューマンの少年が言つ。

「あ、あの～、あなたたちは？」つとエミリアが2人に訪ねる。

？「ああ、申し訳ありません。紹介が遅れました。僕の名前は、ディオン。ディオン・バーデン」

？2「俺は、ソロ。ソロ・レスター」

つと青年と少年が自己紹介をする。

「俺の名前は・・・・・」

つとルークが自己紹介しようとしたが、

「君たちのことなら、よく知ってるよ。ルークさんとエミリアさんですよね？」

「「え?」」「と驚くルークとHニア。

「ど、ど?して、あたし達の名前を?」

「何故つて、お前達よく雑誌などに載つてじやあねえかよ」

「雑誌に載つてゐただけで、実際パツと見ただけで、分かるものか?」
つと聞くルーク。

「……、分かつたよ、正直に。」「ヒーリングが。」

「いいのか?兄貴?」

「言わないと、疑われるからね。だが、その前ミケのことで謝らないと」ヒーリング。

「まつたく、アイツのせいで、仕事もやりこへくなるだらけだ。」
ソンロが右手を頭に当たて、ため息をつく。

「ミケ、じつに」「ヒーリング」とソロが叫ぶ。

「……。」ムスッとするミケ。しかし、

「僕の頼みでも……かい?」ヒーリングがいつ。

「ツーーー(顔は笑つてゐるが、なんだ、この威圧感は)」「ヒル
ークは感じた。

ミケはしづしづ頷き、ゆっくりトライオンに近づく。

「瞬間移動みたいな特殊能力が使えるんだから、使えばいいじゃん」と言ったエミリアだったが、

「力が残っていないから、使えない」 つと苛立ちながら叫びつ。

「ミケ……さつさとこの2人に謝れ」 つとミケ言いつ。

「……」 めん つとミケが心がこもつてない謝り方をする。

すると、

ドカッ！！

ディオングミケを叩きつけ、ミケの頭を押しながら、

「ちやんと謝りな？ミケ。」 つとディオングが言つ。

「痛い痛い、ディオングさん、痛いよ。」 つと痛がるミケ。

「謝りなさ」 つと、言つてるんだよ。 つからに押し付けるディオング。

「うわーーー、痛そり。」 つとエミリアが言つた。

「わ、分かった。」「ごめんなさーーー」 つとミケがもう一度謝る。

「いいよ、よく出来たね。」つと言いながら、ディオンが押し付けた手を離す。

「だいたい、人を襲撃しといて、謝るだけでいいのか?」つと疑問がるソロ。

「わうだね、どうしたらいいかな?」つとディオン。

「えっ～～～、僕、謝った意味なくない?」つとミケ。

「・・・・もう一度、謝るかい?」つと笑顔でミケに睨む。

「いやいや、もうこことよ

「はあ～～、どうする? ルーク?」つとH//コアがルークに囁く。

「まあ、俺たちも戦つて、ミケに傷付けたしな。」
つとルークが答える。

「そうだ、君たちも謝・・・・・痛ツ!」またディオンに頭を叩きつけられる。

「もう一度、謝りなさい」つとトイオングミケの頭をさつきより強く押しながら囁く。

「いみんなさい!...」
つとミケ。

「はあ～～、」また右手を頭に当て、ため息をつく。ロン。

「一ついいか?」つとルークがティオンに質問をする。

「はい、何でしょつか?」つと威圧感のない笑顔で答えるティオン。

「お前たちは・・・・」つと質問をしようとしたら、突然、

ペペペペペペペペ

「とHミコアの通信がなった。

「誰からだ?」つとHミコアに言つルーク。

「ええと、お父さんからだ」つと通信に出す。

『おい、Hミリア、ルーク。依頼に会った不審人物の5人がガーディアンズに捕まつた。どうやらガーディアンズが巡回中に見つけたらしい。不審な5人なんだが、元ローグス3人と強盗2人だつたらしい。どうやら5人で銀行を襲う計画をしていたらしい。やつらの持ち物からそれらに使う道具もあつた。

つていう事だから、帰つて来てもいいぞ。』

つと通信を切るクラウチ。

「つていうか、依頼を受けてたの忘れてたな。」つと右手を頭に当てるルーク。

「いろいろあつたもんね。さすがにもう疲れたよ」つとHミリアが答える。

「そうだな、久しぶり凄い戦いをしたしな」つとルークも言つ。

「せういえば、質問があるつて言つてたね?」 つとディイオンがルーグに言つた。

「兄貴、俺が見る限り彼らは疲れてるし、長話もあれだ。田を改めないか? それにミケの説教しないと、つとソロが言つ。」

「えつーーまたーー説教? 勘弁してよ。」 つと豆がミケ。

「うーん、僕はその意見に賛成だけど……、君たちは?」

「せうだな、とつあえず今日は帰るつか?」 つと豆がミケ。

「いいの? ルーク? まだ会つて時間も経つてないのに言じていいの?」 つと豆がミケ。

「とつあえず、田を改めて話す」とつと豆がルーク。

「じゃ、この店で話すから……。」 つとルークに店の名前が書いたパンフレットを渡す。そして、クイックと首でパンフレットにやせたアートをしまいながら、言つるーク。

「じゃ、3日後」「つとディイオンが言つ。そして、ディイオンが「……分かった、じゃこの店で、」 つと何かに気がついたルークは、パンフレットをしまいながら、言つるーク。

「せひと、ミケ、ソロ行いつか。」 つと豆がボタンをこじつた。「じと、ミケ、ソロ行いつか。」

てる。数秒後船が真上に止まり、ゆっくり降りてきた。

「じゃ、3日後に」つとディオンが右手をあげながら船に乗り、その後にソロ、ミケが続く。ミケは少しまだ、フラフラしている。そしてミケが振り返り、頭を下げる。

ドアが閉まり、ディオン達の乗った船は立ち去つて行つた。

「H//リア、俺たちも帰るか。」つとH//コアにいい、

「そうだね、帰ろつか。」つとH//コアが船を呼ぶ。ディオン達の船とは違い、ふねが着くのは遅い。数分後、船が到着し、ゆっくり船が降りてくる。

「さあ、帰ろつか?」つとH//コアが言つ。

「そうだな」つと船に乗ろうとしたが、

「?/?/?」つと不意にルークが振り返る。

「……」辺りを警戒してゐるのか、辺りを見渡していく。「何やつてるの~、置いていくよ~。」

「気のせいいか?」つと警戒していいたルークだが、H//リアが急かされたので、急いで船に乗る。

そして、H//リア達の乗った船が飛び立つて行つた。
・・・・ガサツ!!

? 「危ねえ、危ねえ、アイツ警戒してたよ」

? 2 「あの人、なかなかの腕前だつたね。凄い戦いだつたね。それもある子供も」

? 3 「ま、俺たちの相手じゃないだろ？。まだあの腕じゃ」

? 5 「でも、あいつと戦いたい。つていうか今直ぐにでも」

? 「みせ、みせ、まだ俺たちの力を見せるのはあとだ。」

? 3 「そうだな」

? 4 「はあつはあつはあ、やつと見つけたツスよ。置いくなんてひ
ビニッスよ」

? 「わりいな、さてと、行くか」

? 2 「そりですね。私達の計画を達成するために」

第一話：依頼（終）

第一話・依頼4（後書き）

まず一つとして、Hミコト達の船を呼ぶよつとしたのせ、ミケが船を壊してしまったので呼ぶよつしました。

正直に書ひとい、どうやつてパルムにせんせがどうしたのへつと書いてて思つたのやれのやうな形になつました。

1 1 依頼報告（前書き）

第一話では、「じぞこません。第一話が始まる前ですでの、1 1にしました。

最初の1 は、第一話、みたいな、ものです。
では、どうい。

「リトルウイニング」

リトルウイニングにしたルークとエミリア。 そうしてエミリアがルークに言う。

「あんた、本当に怪我、大丈夫なの？」 つとエミリアがルークの怪我の心配をする。

「ああ、何とかな。」 つと答える、ルークだが・・・・

「そんなこと言つけどさ、あの時の傷が大きくなつたら・・・・」
つと言つ。

そう、ルークは一度、怪我をしたのである。だがルークは、

「大袈裟だよ。单なる、かすり傷だろ？」 つとルークは、言つが。

「あれが、かすり傷つて言えたもんね。鍼を縫つほどの、怪我だつたのに」

「怪我を心配してくれるのは、嬉しいが、クラウチに依頼の報告しないと。まあ、不審人物の5人はガーディアンズ達が捕まえたがな」と言つルークにたいして。

「あの3人の事、話すの？」 つと言つエミリア。

だが、ルークは、

「いや、まだ言わない方がいい。彼らを知らなわけあるからな。」
つとルークが答える。

「でも、その怪我を見て、何か会つたって、聞かれたりびつするの？」つとエミリアがルークに聞く。

そしてルークは、

「よそを見したら、崖から落ちたとでも、言えばいいだろ。」
つとルーク言つ。

「……絶対信用しないと思つ。」つとエミリアが呆れながら言
う。

「まあ、その時に、言い訳を考えよう。とりあえず、事務所に行こ
う。」つとルークがエミリアに言つ。

「（スッゴい、心配なんですけど）」つと、口では言わず、心の中
で思いながらルークについていくエミリア。

（リトルウイニング事務所）
プシュ、

つとドアが開き、事務所の中に入る、ルークとエミリア。奥には、
クラウチがいた。

「クラウチ。今帰つたぞ」つとルーク。

「おっ、帰ったか……。つてか、おめえ、ビーフしたんだよ? その怪我は?」つと聞いてるクラウチ。

「これか? 油断していたら、原生生物に攻撃された。」つとルークが答える。

「……、そつか。Hミリアは怪我はないのか?」つとHミリコアも聞く。

「あたしは特に痛いところは、なによ」つとHミリコアが答える。

「んで、何のようだ?」つとクラウチがまた質問する。

「依頼の方は、ガーディアンズが片付けたが、一応、依頼報告をしようと思つたんだよ」つとルークが答える。

そして、更にルークは言つ。

「もう少し、あの辺を捜索した方がいいかもしない」つとルークが答えた。

「えつ?」つとHミリコア。

「なにつ?」つとクラウチ。

「どうこつ意味だ?」つとクラウチが質問する。

「……、单なる勘だ」つとルークが答えた。

「「？」」「？」 つとクラウチとHIIコアが頭の上に、マークが浮かぶ。

「・・・それより、ルーク。今日、おめえ、休みだつたな？ 今日はもういいから、部屋で休め。今日の休日は明日にするからよ。」 つと行つたクラウチだが。

「なあ、クラウチ？ その休日、3日後にしてくれないか？」 つとルークが言う。

「んつ？ 何でだ？」 つとクラウチが聞く。

「その日、少し行きたい場所があるんだ。もしかしたら、1日になるかもしれないし」 つとルークが答えた。

「？？？、まあ、おめえさん、が3日後にしていなら別にいいけどよ」 つとクラウチは許可をした。

「（やつぱり、行くんだ・・・）」 つとHIIコアが心配そうに、心中で呟いた。

「じゃ、クラウチ。俺はこれで、失礼するよ」 つとルークは、右手を上げ、事務所を出た。

ルークが部屋を出たのを確認すると、

「なんだ、アイツ、何で怪我をしたんだ？」 つとHIIコアに聞くクラウチ。

「えつ？あ、あいつ、こいつ、言つてたじやん。げ、原生生物に攻撃されたつて」つと焦りながら言つHミコア。

更にクラウチは、

「あんな嘘、ガキでも言えらあ。嘘を聞かされて、素直に、はい、そうですか？って言つわけねえだろ？だいたい、急に襲われたからと言つて、あんな怪我はしないだろ？アイツならなおさら。」つとクラウチが言つ。

「うううう、」つと更に焦り、言葉を失つHミコア。

「・・・・、お前のその焦り様から見て、やはり、原生生物に攻撃されたのは嘘だな？」つとHミコアに聞く。

も、観念したのか、Hミコアは

「うそ、」

つとHミコアは頷いた。

クラウチは右手を頭に当て、ため息をつく。

「詳しいこと・・・・、話せるか？」つとクラウチはHミコアに聞く。Hミコアは、「クリつと頷き、依頼中に、あつたことを話した。

「なるほど、んで、3日後に会おう、つてことで、休日を3日後に

したんだな？」 つと難しい顔する。

「うん・・・」 つと、H//リアは、頷いた。どこか、元気がない返事だった。

「まあ、さらに詳しい内容は、アイツから聞くとして、H//リアは今日はもう、休んでいいだ。」 つとクラウチが言つ。

「うん、わかった」 つとH//コアは答え、H//リアも事務所を出た。事務所出ですぐには、

「クラウチに、話したんだな？」 つと不意に右から声がした。

「つまえつ？」 つとH//コアが驚く。

声がした方を見ると、ルークが立つていた。なにやら怒つた顔している。

「クラウチに、話したんだな？つて聞いてるんだーー」 つとれつとより大きな声で言つ。

「あ、あたしだって、言いたくなかったわよーー。でも、お父さんには聞かれて、仕方がない。そもそも、あなたの嘘が、下手だから、こうなったんじゃないのーー？」 つとH//リアも怒鳴る。

「だから何か？それで話してしまつのかよーー」 つとルークが言つ。

ガヤガガヤ

「と回りが騒がしくなる。

すると、事務所からクラウチ、ウルスラ、チヨルシーが出てきた。

「おい、ルーク！！おめえ、いい加減にしろよ…！」とクラウチが怒鳴る。

「エミリアの言う通り、正直に話さない、おめえが悪いんじゃねえのか？」とクラウチがルークに叫ぶ。

「正直に話さない？ それだけ、俺が悪いのか？ 話せない事を聞くあんたも悪いじゃないのか？」とルークがクラウチを睨む。

「てめえっ！」とクラウチを睨むが、

「ルーク！！ あんた、本当にこの加減しなさいよ…！」とまたエミリアがルークに怒鳴る。

「はあ…、わかったよ…、」

「とルークは、そのまま部屋には行かず、マイシップに入つて行った。

「てめえ、まだ話しさ」 とクラウチが叫ぶが、ルークは無視して、マイシップに乗る。

そして、そのままどこかに行ってしまった。

「エミリアっ？ アイツに酷いこと…、」 言われたのか？ って言

おうとしたクラウチだが、

「……」エミコアは涙を流してた。

「エミリア……」つと心配したクラウチ。

「どうしたんだよ？本当にアイツに酷い」と言われたのか？」つとクラウチが焦つて、エミリアに聞く。

「……」エミリアは答えない。いや、答える事が出来ない。エミリアは後悔していた。無駄だと分かっていながら、クラウチに嘘を言つたルーク。それなのに、嘘が下手だからつと言い、ルークのせいにした。いや、気にしてるのはそこではない。今までルークとあれほどまで、口喧嘩をした事がない。そして、マイシップに乗るルーク。そう、それはまるで、家を飛び出した自分と似ている出はないか。それをエミリアは気にしてた。何しろ、ルークは戦いで怪我をしている。前の傷も完全に治つてもいいにも、かかわらず。エミリアはそれを気にしてた。

「仕方ねえ、ルークの方は俺が追つ。エミリアはこのまま休め。いいな？」つとクラウチが言つが、

「お父さん、あたしも行く」と言つてエミリア。

「なに？」つとクラウチが聞き返す。

「嫌な予感がするの……」つとエミリア

「嫌な予感だと？ちつ、仕方ねえ。ウルスラ、チエルシー、ちよつくら、行ってくる。留守は任せたぜ。」つとウルスラとチエルシーに声を掛ける。

「わかつたわ。」つとウルスラ。

「ちゃん、つれで、帰つて来てヨ」つとナルシー。

そしてH//コアとクラウチはマイシップに乗り込んだ。

1 1 依頼報告（後書き）

登場人物の紹介は、次の話が終了したら、書こうと思います。

ルーク

ディオン

ソロ

ミケ

???（次の話に登場）

の五名です（ちなみに、この登場人物の紹介はオリキャラの紹介ですでの、HMLIA達など紹介はしません。）

誤字、脱字がありましたら、教えてください。

ルーク「次話もよろしく」

1 2 悲しい決断（前書き）

うん、少しずつですが、書くのが慣れました。しかし、もつと頑張ります。

では、

1 2 悲しい決断を「」見てください。

1 2 悲しい決断

「パルム大都市・ショッピング街」

たくさんの人で賑わう、パルム大都市のショッピング街。その中に人の青年が歩いていた。

「はあ～～」

つとため息をつく青年。そう、ため息をついた青年はルークである。

「俺、何であんな事を言つたんだ？」

つとリトルウイングで自分が言つた事を後悔していたのであった。

「あんな事を言つて、更に逃げたんだ、帰りにくい」

つとなど独り言を言つてると、後ろから、

「何をブツブツ言つてるの？」つと声がした。

振り返つてみると、そこには、1人の女性だった。

「・・・、なんだ、お前か。」つとルークは女性に言つた。

「なんだ、つとは何なの？久しぶりに再会したのに、最初の言葉はそれ？」つと女性は腕組みをしながら言つた。

「ほんの一年前に会つただろ？」つとルーク。

「違うわよ、三年前よ。お父さんやお母さんの誕生日やお祖（お爺）
がある設定）に帰つて来なこのせ、”お兄ちゃん”だけだよ。」つ
と女性が言つ。

「なんだ言へばわかる。俺を”お兄ちゃん”って呼ぶなつて言つて
んだる。ソラ。」

「お兄ちゃんだからお兄ちゃんつて言つて何が悪いの。」

「恥ずかしいんだよ……。」つと女性に怒る。

ルークの話していた、女性、ルークの妹のソラ・ミル・オルテガで
ある。

そしてソラは、

「じやあ、何で呼んでほしへ。お兄ちゃん？兄ちゃん？それとも、”
イオ兄ちゃん？”

「最後のはやめか」つとルーク。

「……こつまで、血分をかぐすの？」つとソラ。

「……」つと黙るルーク。

「今まで”トイオ”として生きてきたのに、なぜ偽名を？」つとソ
ラ聞く。

「やつぱつ、兄さん。、リトルウイングを辞めぬつもつなの？」つ

とソラが聞く。

「ああ、やうだ。いや、そのつもつだつたんだが・・・。」

「とまた黙つてしまつルーク。

「辞めるに辞められなくなつてしまつた。」と続きを語るソラ。

「ああ、やうだよ。今、思つとなぜ偽名を使つたんだか・・・。」
「と後悔するルーク。

「じゃあ、どうするの?」とソラが聞く。

「」の先もルークとして生えるか、それとも、ルークを捨てて、ティオとして生えるか「とソラが語る。

「・・・」下を向くルーク。

「お兄ち・・・、兄さん。」

「・・・俺は、」と答えるとしたルークだが、

「あつ、いたいた。ちよつとお姉ちやん。置いていかないでよ。」
「と後ろから男の子がやつて来た。そして、

「わへ、酷こよ・・・・・て、つわつ、ティオお兄ちやん。」と
驚く男の子。

「よお、リオル。久しづり」と黙のナニヤ。

「ほんと久しぶりだよ。雑誌などでお兄ちゃんの活躍を見たよ。すごいねえ、亜空間事件を解決するなんて、しかも英雄だよ」つと笑顔で言うリオル。

この男の子の名前は、リオル。リオル・ルタ・オルテガ。ルークの弟である。

そしてリオルは、

「あつ、しまつた。今は『ティオじゃないもんね。ルークだつた。』つとリオルが言つ。

「いや、『ティオいい。』つとルーク。

「お兄ちゃん?」つとソラが言つ。

「今日、限りで、ルークを捨てる。そして今日から『ティオで生きていく』つとルーク。

「いいの? お兄ちゃん?」つとソラ。

「ああ、もう決めた。・・・それに・・・もう、あそこ(コトル・ウイング)には、帰れないしな。」つとルークが言つ。

「じゃあ、退社するの?」つと聞くソラ。

しかし、ルークは、

「いや、ルークは・・・死んだ事にする。」つとルークが信じられない事を言った。

「「えつ？」」つとソラとリオル。

「退社をすれば、あいつ（ヒミコア）が探すかも知れないし」 つと
言つルークだが。

「それだけは、絶対にダメ」 つとソラ。

「お兄ちゃんが一番分かるでしょう？ もしもルークが死んだ事にし
たら、一番悲しむのは、ヒミコアさんよ」 つとソラが少し怒りがこ
もつた言い方をする。

「・・・・」 何も言えなくなる、ルーク。

「例え、ルークが死んだとしても、ヒミコアさんは信じないわ。必
ず探すわよ。死んだのは嘘だと自分に言い聞かせて」 つとソラが続
ける。

だが、ルークは・・・

「あいつを使えば・・・・ヒミコアも諦める。」

「まさかっ！」 つとソラが声をあげる。

「もう、あいつを使つ」 つとソラが一度言つルーク。

「そんな事をしたら、カイン兄さんが・・・それに、何よりお父
さん達が許さない。」 つとソラが怒る。

「カインが言つていた、俺は兄貴の血で救われた。もし、俺が助か
らなかつたら、俺の体を利用しても構わない、つと。何せあいつは
俺の血で生きて、そして死んだ。」 つと元気なく言つルーク。

「カイン兄さんの奇病の件ね」 つとソラが元気なく言つ。

「僕も、カイン兄さんの体の事について聞いた。承認として……。確かに言つてた。俺が死んだら体を利用しててもいいって」 うつ向きながら言つリオル。

「でも、お父さん達が……」 つと言つたソラだが。

「……もう、決めた事だ。父さんも母さんも関係ない……」 つとルークは元気なく言つ。

「……ミリアさんは……どうするの？」 つとソラが聞く。
「あいつは、もう一人前だ、俺がいなくともやつていける」 つと答えるルーク。

「……」 これ以上なにも聞かないソラだった。
「まずは、髪型を変えないと。」 つと何処かに行こうとするルークに対してもソラが言つ。

「本当に……良いのね」 つとソラが言つ。

そしてルークが立ち止まりそして、いつ言つ。

「ルーク・フィレンは、今日で終わり。俺は、ディオ・ルタ・オルテガだ。それと……お兄ちゃんって呼ぶな。」 つと言つて歩き出したディオ。いつも通りに言つたつもりだったが、ソラには分かってた。顔はいつもの同じだったが、心はとても悲しんでいた。

ソラとリオルから少し離れた所で立ち止まり、ディオは涙を流した。
そしてディオは呟いた。

「ヒリア……みんな……すまない」と。

そしてまた歩き出したディオだった。そしてディオは通信機とパンフレットを取り出した。パンフレットはディオンからもらつたものであり、実はすみの方にディオンの番号が書いてあった。そしてディオは書いてある番号にかける。

『はい、ディオンです』

『どうも、ルークです』

『……ディオでいいですよ。』

「……？」

「なぜそれを？」

『ソラちゃんとリオル君に聞いてないんですか？』

「？？？」

『彼女らは、僕達の立ち上げた部隊に入ってるんです』

「なんだって！？」

『驚くのも、無理がないと思います。どうでしょ？。会ひに来い

縮めましょつか?もちろんあなたの都合に合わせますよ。トイオさん。

『

「明日・・・」

『???:』

「明日の10時に、この店で」

『この店とは、そのパンフレットの店ですか?』

「ああ」

『残念ですが、その店、潰れますよ。』

「なにつー?」

『僕のお気に入りの店があるんですが、その店にしませんか?』

「わかった。なんという店の名前だ?』

『ラッピーカフェと言つ店です。名前は、あれですが結構人気の店なんですよ』

「わかった。ラッピーカフェだな」

『はい、あつ、いい忘れました。ラッピーカフェはパルム大都市のカフェ街の中間辺りです。』

「わかった。』

『それでは、また明日』

「まつてくれ。」

『はい？何でしようか？』

「そこで詳しく話してもらうかな」

『貴方も、そのつもりで来てくださいね』

「ああ、わかった」

『それでは、失礼します』

電話が切れ、ディオは通信機とパンフレットをしまい、歩き出した。

次回

第一話：嘘と真実

1 2 悲しい決断（後書き）

次回、第一話・嘘と眞実ですが、その前にオリキャラの登場人物の紹介です。
紹介のキャラは

ディオ（ルーク）
ソラ
リオル
ディオン
ソロ
ミケ です。

謎の5人は名前が5人登場次第書ききます。 ちょくちょく謎の5人が登場してきます。 本格的活動はまだしません。

オリキヤラ登場人物（前書き）

無駄な所を省いたことにより、ページが極端に少ないです。

ディオン「少ないのは、貴方の発想力がないからでは？」

ソロ「兄貴の名前、ディオン。そして、英雄の名前ディオ。かなり似てるし、発想力のなさがでてる」

ディオンとディオは、全然違うよ。マカロンとまじりんみたいな。

ミケ「M SP からとりました？」

そ、そんなことはない。

ディオン「……（目が泳い出ますね）」

ソロ「短いが、見てくれ」
あつ、俺のセリフ……。

オリキヤラ登場人物

ディオ・ルタ・オルテガ

種族：ヒューマン

年齢：22歳

タイプ：ブレイバー

一人称：俺

髪色：金髪

服装：

イロハフブキ白×黒

今作の主人公。旧名がルーク・フィレンで今まで、エミリア達に”ルーク”と呼ばれて、いたが。実はその名前は偽名であり、本名は、ディオ・ルタ・オルテガである。ある事件により、偽名のルークで、暮らしていたが、リトルウイングで偽名を使った事を後悔している。とある、ことでリトルウイングを飛び出したことも後悔している。

無理矢理、髪型を変えたり、服装も変えた。今後はディオとして、生きていく事を決める。

ソラ・ミル・オルテガ

種族：ヒューマン

年齢：19歳

タイプ：フォース

一人称：私

髪色：金髪

服装：カグヤヒラリ

ディオの妹。

頬つぺたの上に赤い模様？みたいなものをつけている。元カーディアンズで、兄ディオが失踪したため、わずか3ヶ月で辞める事になった。再会後は、ディオには言つてないが、ディオンの立ち上げた部隊に入っている。

リオル・ルタ・オルテガ

種族：ニユーマン

タイプ：ハンター

一人称：僕

髪色：茶髪

年齢：18歳

服装：

パニッシュュジャケット

母親の血が多く繋がり、ヒューマンである兄、姉とは違い、ニユーマンとして生まれた。強くなりたかったので、ソラに無理を言つてディオンが立ち上げた部隊に入った。

ディオン・バー・デン

種族：ヒューマン

タイプ：？？？

一人称：僕

年齢：18～19歳？

髪色：銀髪

イルミナス・コート

ルーク（ディオ）とエミリアが依頼中についた青年。當時は笑顔みたいな優しい顔だが、笑顔で、凄い威圧感を出すことも出来る。自分の立ち上げた部隊のリーダー。ディオンにも、偽名の名前があるとかないとか。ある人物を追つてる。

ソロ・レスター

種族：デューマン

タイプ：ハンター

一人称：俺

年齢：15～16歳

髪色：黒髪

服装：

ブレイブスコートシリーズ（黒×暗い青）

ディオンが立ち上げた部隊の副リーダー。ディオの前で、自分の強さを見せてないので、ディオはソロの強さを知らないが、相当のやり手。ミケに対してもかなり厳しい。

ミケ・ラン・ジャータン

種族：ヒューマン

タイプ：ブレイバー

一人称：僕

年齢：10歳

髪色：青髪

服装：

ジャッジメントコード

ディオ（ルーク）とエミリアを襲つた張本人。ヒューマンでナノブラストを使える。油断したせいか、ディオ達にやられる。その後、無理矢理ディオンに誤らせられた。何故、ディオ達を襲つたのか、まだディオに言ってない。

オリキヤラ登場人物（後書き）

ソロ「なあ、兄貴？これだけで、俺達の事をわかつてもうらえるか？」

ディオン「まあ、自分達がこのような人物だと、今後の話で、わかつてもうえれば、いいと思しますよ。」

ソロ「じゃ、書く必要なかつたんじゃ・・・」

ディオン「あるのとないのでは、違いますからね。」

ソロ「確かにな。んつ？作者がいないな？」

ディオン「彼なら、ディオ君に呼ばれて、出掛けましたよ。」

ソロ「おーおー、・・・締めはビリする？」

ミケ「僕がやるよ。誤字、脱字がありましたら、お願ひします。」

第一話・嘘と眞実ー（前書き）

第一話です。ほとんじが余話になつてますが、気にしないでください。

「ディオ、確かに……」の辺のはず……あ、あっちかな

では、どうや

「パルム大都市・カフェ街」

カフェ街に、ディオがいた。ディオンと話をする日になつたのだが、ディオは、キヨロキヨロしている。

「確か・・・・、この辺のハズなんだが・・・・」

「じつやら、ラッピーカフェを探しているらしい。つとそこく、

「もう少し行つた先の黄色い店ですよ」つと後ろから声がした。振り返つてみると、ディオンがいた。じつやら声の主はディオンだつたようだ。

「あつ、ああ、そつか」つとディオは、答えた。

「ん? あんた1人か?」つとディオがディオンに聞く。

「ええ、ソロとミケは、ある調査をしてもらつてます。」

「? ? ? ある調査?」

「詳しい話は、店で話します。さて、行きましょう」つとディオンは、約束の店である、ラッピーカフェに向かつていった。ディオは

その後を付いていく。

～ラッピーカフェ～

ガチャ、

『いらっしゃいませ！…何名様ですか？』 つと定員が答える。

「一組です。」 つとティオングが答える。

『では、いらっしゃるお席になります』 つと定員がティオ達を席に案内する。

ガヤガヤ、ガヤガヤ

水とおしぼりを持つてきた定員が、

『注文が決まりましたらお呼びください』 つと定員がティオ達の席を離れる。

ガヤガヤ、ガヤガヤ

「なかなかの店だな。」 つと感想を語りティオ。

「それだけではないよ。味もいいんだ」 つと答えるティオ。

ガヤガヤ、ガヤガヤ

「……にしては、少し騒がしいな。」

「あれが、原因だと思つよ」つとディオンが指を指す。その先にはモニターがあつた。モニターには、グラールチャンネル5がやつていた。どうやらニュースの内容で、ガヤガヤしていたらしい。

『リトルウイニングのルーク・フィレン、失踪。今現在、リトルウイニングのメンバーがルークの捜索するも、ルークの居場所、確認出来ず。』つとニュースが流れていた。

「……」

「帰らなくて、いいのかい？」

(少し、会話だけになります)

「ああ、」

「偽装死亡……止めたそつだね。ソラちゃんに聞いたよ」

「ああ、やつぱり、悲しむ人を見たくない」

「あれほど、ルークは死んだ事にするつと黙つてたのに、なんで？」

「…………夢を…………見たんだ……」

「夢？」

「エミリアの夢だ……俺が偽装死亡したことにより、エミアが凄い落ち込むんだ。いや、それだけじゃない。俺は、偽装死亡したことにより、エミリアの笑顔を奪ったんだ。それで、エミリアはもう、笑うことはなかった

「だから、偽装死亡は止めたのかい？」

「偽装死亡をするつと言つた自分がバカみたいだ。（ミカニ、エミリアを守つて、つと言われたのにな）」

「まあ、いいんじやないかな？ そういうのは、夢に限るよ。」

「ああ、そうだな。」

「それより、何か頼も。何飲む？」

「そうだな、カフエオレにしよう

「じゃあ、僕はホットコーヒーにしよう」

定員を呼んだディオンは、それぞれ注文するやつを頼み来るまで、例の話をする。

「ディオン、早速話なんだが

「待つて、つとディオンが話を止める。

「どうした？」

「ディオンじゃ、君と被るから……そうだな……ルークにしてくれる?」

「ふざけるな」

「「めん、「めん。冗談だよ。ディックつよんでくれるかい?」

「ディック?」

「僕のもう一つのなまえだよ。ディック・ハリンソン。僕の偽名の名がこれだよ。」

「なぜ、偽名で呼ぶんだよ……」

「だから言つたでしょ? 被るからだよ。」

そう、話をしてると、注文した物を持ってきた定員に注文した物を渡され、席から離れる定員。

「つで、まず聞きたいのはあるかい? つと言つてディック。
「あんた達の目的はなんだが」

「目的……か」とコーヒーを飲みディック。

(会話だけになります)

「実は、僕達は妙な動きをしている5人をあつてるんだ

「妙な5人?」

「君たちが、依頼を受けたのはなんだつたかな？」

「怪しい5人の調査。だが、それは元ローグス3人、強盗2人で、それと関係ないぞ？」

「いや、関係あると思つよ。」

「！？」

「依頼を受けた、怪しい5人がその5人じゃなかつたとしたら・・・。？」

「！――！」

「そり、その依頼は、まだ終わつてない」

「ま、まさか」

「しかも、その5人が、僕達の追つている5人の可能性もあると思うんだ。」

「（あの時の、妙な感覚はこれのことか？）」

「まあ、決まつたわけじや無いけど、その可能性が大だね」

「そいつらの名前を知つてるか？」

「いや、今それを調査をしている所なんだ。つてな、訳で、それ以

外なら、話せるよ。」

「なぜ、その5人を追つてるんだ?」

「……、このグラールを救うため」

「なに?」

「彼らは、このグラールを支配する可能性のあるだ。」

「なぜ、わかるんだ?調査中なんだろう?」

「彼らに、嫌なオーラを感じたんだ。」

「嫌なオーラを?」

「うん、」

「でも、それだけグラールを支配する奴らって決めつけるなど」

「……確かにね。支配だけで終わればいいけどね」

「どうこう」とだ?」

「彼らを調査中つと言つても、全然わかつてないつて事ではないんだ。」

「じゃ、少しならわかるのか?」

『あの5人。やはり、兄貴の言つ通り、このグラールを支配するつもりが高い。』

「やっぱり、そうだつたんだね。」

（話の内容は、ディオとディックにしか、わからないようになり、通信の前にイヤホンを付けてます。）

「名前は、わかるか？」
つとディオが聞く。

『いや、あいつらなかなか仲間の名前を呼ばない。警戒しているのか、「君、お前、お主、」で読んでる。』 つと答えるソロ。

「そうか。ありがと」
つとディックが言つが・・・

『それともうひとつ』 つと真剣な顔と言い方でいつ（通信機は画面？が写る通信機つでわかるかな？）。

「どうしたんだ？」 つとディオが聞く。

『さつき、奴らの目的は、グラールの支配つて言つたが、どうやらそれはおまけらしい、』 つと言つソロ。
「何？じゃ、その5人の本当の目的はなんだ。」

『・・・・・兄貴には、5人それぞれ違う種族つてのは聞いたか？』

「ああ、聞いたが、それがど・・・・・ つと言葉が失つ。

「もしかして……」
ティックがソロに聞く。

『ああ、間違いない……あいつら種族戦争を起しそつもつだ
なんだって』 つと声を上げてしまつティオ。その声に、反応しテ
イオに向く、客。

『すいません』 つと謝り、小さく声で、ソロに聞く

『ま、間違いないのか？』

『ああ、あいつらそんな話をしていた。……聞き間違いであつ
て欲しい。』 つと悔しそうに答えるソロ。

『それに、あいつらの嫌なオーラの意味もわかつた

『なんだい？』 つと聞くティック。

『あいつら……転生を使つてゐる』

『転生だつて？』

つとティックが聞く。

『ああ、間違いない。凄いオーラを感じる。……勝てないオー
ラを……』

『……わかつた……ありがとう。もつと上げてもいいよ

『わかつた。これより帰還する』

少し間があく、すでに2人の飲み物は空だ。

「大変な事になつたね」

「ああ」

「・・・・・」

「・・・・・」

「せひと、話の続けよ・・・・・」 つと通信前の話をしようとしたが、

「あんた、いいのか！..種族戦争だぞ。そんな事が起きたら、世界がほろびるんだぞ」 つとディックに怒る。

ディックは

「わかつてゐよ」なぜか落ち着いてゐる。

「なぜ、そんな落ち着いていられるんだ。」 つと聞くディオ。

「なぜって、あいつらにはまだ、種族戦争どころか、グラールの支配さえ出来ない。」 つと答える。

「えつ？」

「考えてみなよ。今のグラール。みんな種族差別なく生活してゐるで

しう。まず種族差別をするには、グラールを支配する必要がある。だけど、このグラールには、ガーディアンズ、同盟軍、ローグス、リトルウイング。SEEDを封印した英雄のイーサン・ウェーバー。・・・そして・・・亜空間事件を解決した英雄、ルーク・フレンこと、ディオ・ルタ・オルテガ。君たちの力が統一すれば大丈夫だよ」と答えるディック。

「凄い自信だな？」

「自信じゃない……答えさ。この世に強い絆を持てば、不可能を可能に出来る。君たちのその強い絆を力に変える。それが唯一、グラールを救う事であり、彼らに対抗出来る力。それが絆さ」

「……」つとディックの言葉に言葉が出ないディオ。

「1人で戦うなんて、バカな事を考えない事だね。」

「あいつら、転生してるんだろう?」

「転生してるから、絶対に強くなるとは限らない。転生して、強くなつたつと考えると必ず怪我をする。転生しても、かなり努力しないと、強くは慣れない。それに転生しても、必ず強くなる保証はない。逆に弱くなるかもしれない。……」つと悲しそうに言う。

「？」つと疑問をつにするディオ。

「昔いたんだよ、僕達の部隊に、転生して強くなつたつと言つてい張つて死んだ仲間がね。全くバカなやつだよ。」

「・・・・・」

「グラールを救うためにはまず絆を掴まなければならない。今のグラールの絆よりも大きな絆が。彼らに支配されると、絆は簡単には崩される。そうなる前に……」

「そうだな。」

「ところで、H//コアちゃんから通信……来ないね。心配してるのは誰なの?」

「H//リア達の通信は拒否しているからな。」つと答えるトヨオ。

「そつか、」

「……」

「まずは……」

「? ?」

「あなたの話を聞くのが先だつたな?」

「そうだね」と舌真を呼び。

「? ?」

「H//ビーのおかわりください」

「あつ、俺も」

『はい、かしこまりました』 つと店員がディオ達の席を外した。

「それじゃ、話そつか。僕達の絆を深めるために」

第一話：嘘と眞実1（後書き）

「ディオ、嘘と眞実にあまり関係ないな」

なに、これからですよ。まだ1番田だから。

「ディックーそれは楽しみですね」

でしょ二、君となら話が会二、かも

テイオーはあります

ଶିଳ୍ପିମାନ

デイオ「??」

通信？

ディック 僕だ

ピツ

ソロ『誤字、脱字があつたら教えてくれ』

第一話・嘘と真実2（前書き）

もつ、ほとんじが会話です。

「ディック」「一ヒーおかわり」

「ディオ」「俺も、」

ちなみに飲み放題です。セルフサービス出はなく、店員が運ぶ珍しい店です。

店員『それでは、嘘と真実2、御覧下さい。』

（リトルウイニング事務所）

「どうだ、見つかったか？？？わかった。調査を続けてくれ」

ピッ

「はあ～、あの馬鹿、何処に、行きやがった。」 つとクラウチが腹をたてている。そこへ、

「クラウチ、ルークは見つかったの？」 つとウルスラがクラウチに聞く。

「いや、ルークが乗つてた船なら見つかったんだが、肝心の居場所までは、まだだそうだ。」 右手で自分の頭をかくクラウチ。

「チヨルシーは、店に来る客に聞いてるそなんだけど、今のところ手応えがないみたい」 つとウルスラも答えた。

「ナギサの方も数分前に、通信があつたんだが、手応えがねえそうだ。」

「そう、何もなければいいけど

「とにかく、・・・ヒーリアの様子はどうだ？」 つとクラウチが

ウルスラに聞く。

「いつもと変わらないわ。」 つとウルスラが答えた。

「そうか。ルークがいなくなつて、駄目になるかと思つたがなあ。」

「『今度は、あたしがルークを助ける番』 つと行つて、探しに行つたわ」

「ホント、変わつたよな。あいつ。」

「彼のおかげよね。あの子が変われたの」

「ああ、やうだな」

「・・・・」

「んつ?・?づした?」

「な、何でもないわ。」

「?・?・?」

・・・・数日前

「ルーク、ちょっといいからじぶ。」

「えつ?あ、はい。なんですか?」

「H//ニアの事なんだけど

「H//リアがどうかしたんですか？」

「別にどうかした分けではないわ。」

「はい？」

「あの子が変わったのは、自分のおかげでだ、って考えたりする？」

「いえ、ただ俺は、H//ニアの変わることをサポートしただけで、別に俺が変えたわけでは、ないですよ。・・・・なぜそんなことを？」

「前も、H//リアについて話した事、覚える？」

「同じような、話した気がしますね」

「わづね、じゃその後の話した事、覚える？」

「クラウチの家族の話？」

「その前よ」

「・・・・・、あなたが、ふと彼女の前から消えるんじゃないから、話ですか？」

「その通りよ」

「・・・・・」

「ルーク？」

「大丈夫ですよ。ヒミコアの前からいなくなつたりしませんよ。」

「それを聞いて安心したわ。・・・・・いつまでもヒミリアを守つてあげてね。一人でいるのは、寂しいと思うし、何よりあなたのパートナーでもあるからさ。」

「任せてくれ」

「頼もしいわ」

・・・・現在

「（あの時の話が現実になると、思わなかつたわ。）」

「ウルスラ、大丈夫か？」

「えつ？ええ、大丈夫よ。それより、クラウチ、ヒミリアからの通信はあつたの？」

「いや、まだだ。もう少しだと思つ・・・・・」

ループルッシュ

卷之三

• • • •

ラッピーかフヨ

「なるほど、セーフティードラッグだったんだ」

「驚くのは、当たり前ですかね」

ディオとディックが雑談をしている。

「ところで、マケの、『だよね～～』ってのは、なんだ?」つとト
イックに聞く。

「ああ、それ? 単なる癖だよ。」 つと答えるルーク

「癢？」

「たまに、やるんですよ。相手を馬鹿にした言い方。やめなさい」と言つても聞かなくて」

「ミケのヒーローマンのナノブластは?」

「転生に失敗したんだ。」

「転生に失敗した?」

「僕達の転生機械はヒューマンはヒューマン、ニコーマンはニコーマンの専用の転生機械なんだ」

「つで、間違えて、ビーストで転生したわけだ。」

「そういうこと。まさか、成功するとは思わなかつたよ。今後こんな事がないように壊したよ。あつ、もつ結構時間たつたね。もうこの辺にしようか?」

「2ついいか?」

「なんですか?」

「あんた達の部隊の名前は?」 つとディックの立ち上げ部隊に、ついて聞く。

「部隊の名前? そりいえば言つて無かつたね。僕達の立ち上げた部隊の名前は、【一種族】部隊つて言つんだ。」 つと答える。

「えつ? い、一種族部隊? なんだよ、それ?」

「もともと僕達は、一種族だったのは、知つてる? ヒューマンによつて、ニコーマン、キャスト、ビーストが造られ、そして各種族の関係が悪化し戦争が起きた。戦争は終わつても、しばらくの間は、種族差別は続いたと思う。デューマンという新たな種族も誕生した。」

今は種族差別つと言つたものはないけど、もし、種族差別があつたとしたら、種族をなくし、皆が一種族になれば、種族差別もなくなると思うし、戦争も起こらないと思う。そういう意味合いもあって一種族部隊にしたんだ。」つとディックが答えた。

「一種族か・・・」

「例え一種族になつても差別は続くと思つ。僕達は差別つと言つたものを無くしていきたい。種族差別が起きた場合、グラールが滅び、戦争が始まる」

「・・・」

「そつなる前に、彼らを倒さなければ。」

「そつだな。」

「もう一つ聞きたい」とはなんだい?」つとディックが言い、

「あんたも転生しててるのか?」つとディオが聞く。

「うん、家の部隊で転生しているのは、僕と、ソロ、ミケの3人だよ」つとディックが答えた。

「わかつた、」

「そつだな、話も終わりにしよう。」

「そつだな。」

「何かあつたら、連絡するしつ連絡先教えるから。」

「あんたからも連絡しろよ」

「わかつてますよ。」

お互に連絡先を交換する。

「じゃ、失礼します。お金の方は僕が払いますので」

「いいのか？」

「大丈夫ですよ。では、失礼します」と会計をし、店を出たディック。そして、その後すぐに、ディオも店を出た。

「パルム大都市カフェ街」

ここに1人の少女と1人の少年が歩いていた。何やらぶつぶつ言いながら、歩いている。

「ルーク・・・どこに行つたの・・・・」

あまり元気のない言葉だった。

「エミリア。大丈夫か？」

つと少年が少女に声をかけた

「え？ あ、うん、じめんね、ゴート。大丈夫だよ」

H//コアとゴート、エリザベスと少年はいの2人のようだ。

「H//リア、ルークがいなくなつて、元氣がなじぞ。」 つとゴートが言つ。

「だつて、ルークがいなくなつたの・・・」

「H//コアのせこじやなじぞ・・・」 つとゴートが言つ。

「え？」

「クラウチだつて、お前のせこじやないつて言つてゐし、ルークだつてそんなことを言つはしない」とゴートが言つたのだが

「何で、あんたがルークの思つてゐるところがわかるのよ。」

「匂いでわかる。あいつには、そんなことを言わなに匂いが。」

「そんなんでわかるわけないでしょ！」 つと怒鳴るH//コア。

「今、氣にしてゐるのは、あたしが、お父さん」嘘を言つとけば、こんな事にはならなかつた。それに・・・あんぐらいで怒つて飛び出したルークに怒つてやるんだ。」 つとH//コアは言つた。

「H//リア、お前なんだかルークみたいたぞ？」

「えつ？」

「エミリアがいなくなつた時のルークに少し似てる。」

「でも、ルークみたいに強くなれない。」

「エミリアもずいぶん強いぞ。」

「ううん、あたしは強くなじよ、お父さん達が心配しない様に、強くみせてるだけ……」つと話していたエミリアだが

「エーの匂い……」

「えつ？」

「エーの匂い……ルークの匂いだ」つと走り出すルーク。

「えつ？ ちよ、ちよと待つてよゴート。」ゴートを追いかける、エミリア。

「あそこだ。あそこだよ」「エーの匂い」「ゴート

「はあ、はあ、ルーク！」つとエミリアが呼ぶ。

・・・しかし

「・・・・・」ルークと呼ばれた青年は無視して歩く。ルークと呼ばれた青年・・・・・、う、エミリアのパートナー、ディオ（ルーク）だった。

「ちゅ、ちゅっと、ルーク！…」つと言つたエミリアだが

また、無視して歩くディオ（ルーク）

「お前…！」つとゴートが走つてディオの腕を掴む。

そして、

「お前ら・・・だれた？」つと言つたディオ（ルーク）に驚く2人
「誰つて、何言つてるの？ルーク。」つと言つたエミリアは、泣き
そうな声で言つ。

「ルーク？悪いが人違いだ。俺の名前はルークじゃない」つと言
ゴートの手を自分の腕から優しく離させる。

「あんた、何言つてるの…！もしかして、まだ怒つてるの…？」
エミリアの目から涙がでてきた。

しかし、ディオは

「あんたもしつこい人だな、俺はルークじゃないつていつてんだろ
！…」つと怒鳴るディオ（ルーク）。

「ルーク・・・・」

「まったく、」つと言ひ歩き出すディオ。そして惑星移動の大型船
(電車みたいな乗り物)に乗るディオ。
「ルーク！」つとエミリアが走り、今度はエミリアがディオの腕
を掴む。

「いい加減にしろーー！」つとおもこつをつH//コアの手を離す。

「……」つと驚くH//コアを無視して船に乗るティオ。そして船は飛び立つていった。

「ルーク……」つと膝を地面に付け、顔を手でおおえ、泣くH//コア。

「H//リア……」コートはH//リアに言葉をかけようとしたが、やめた。いついう時、なんと声をかけたらよこのかわからなかつのである。

つとその時、

H//コアがクラウチに通信をした。

「もしもし、お父さん。」

『も、もしもしH//リアか？どうだつ……どうしたH//リア？何で泣いてるんだよ？』

「実は、ルークを見つけたの。」

『何？ルークを見つけた？それでなんで泣いてるんだ？』

「も、ルークは……ルークじゃない。あたしの知ってるルークは……もう、何処にもいない……」

『……どういう意味だよ、それ……』

／＼＼＼＼

『・・・・わかつた、お前ら、とりあえず、戻つてこい。』

「わかつた」

「大丈夫か？エミリア」つとゴートがエミリアに聞く。

「うん、大丈夫。とりあえず帰る。」つとエミリアとゴートは船に向かつて行つた。

その光景を見ていたディックが。

「本当に、よかつたんですか？」ディオ君」つと呟いた。

第一話・嘘と真実2（後書き）

まだまだ嘘と真実は・・・

ゴート「お前がエミリアを泣かしたなーー！」

な、泣かしたのはルーク（ディオ）で

ゴート「ルークがエミリアを泣かすわけがない」

ちよ、ちよつと、待てゴート話を・・・『わやーー

エミリア「・・・・」

ディック「誤字、脱字がありましたら、教えて下され（ほやほや）」

第一話・嘘と眞実③（前書き）

やつ、ほとんじが、余話になつてます。

「モトブウ・カジノシティー

「・・・・・」

わいわい、

「・・・・・」

がやがや

「どうやら、船を間違えたな。」

「トイオは右手を顔に当てた。

「ま、せっかく、カジノに来たし、少しだけやらいつかな?」つと考
えていふと。

「ルーク・・・・さん?」つと声がした。

不意に、偽名の名前を呼ばれたので、ティオは振り返ってしまった。

「あ、つと思つたが、すでに遅かつた。

「やっぱり、ルークさん……どうして、こんな所に？」リトルウイングからいなくなつたつて、エミリアから搜索の手伝いをしての通信がありましたよ！！」声をかけた人物。それは、ガーディアンズのルミアだった。

「お、俺はルークつて名前じゃない。」つと行つてみたが……。

「では、何で振り返つたんですか？」

「う、後ろから、声をかけられたひ、普通振り向くだり？」つとつてみたが、

「知らない方の名前だつたら、普通、振り返りませんよ。」つと言ひ返えされた。

「…………」何も言えなくなつてしまつた。

「ルークさん？」つとルミアが言ひ。

「仕方ない、……久しぶりだな。ルミア。元気だつ……」
だつたか、つと言おひとしたディオだが。

「ルークさん！…それよりも何で、リトルウイングを飛び出し、失踪をなんてしたんですか？それよりも、何で、ここに？」

「君こそ、何で、ここに？君が来るような場所じゃないぞ」

「ルークさんも同じですよ。ルークさんも」のような場所に来るような所じゃありません」

「話せば長くなる。…。すべて話せないが、話せる所まで話をしてくれ。」 つとルミア。

「わかりました」 つとルミアは答えた。

「立ち話もあれだし、あの店で話すよ。」 つとその店に歩いていくディオ。そのあとをルミアがついていく。

（喫茶店）

数分後

「そういう事だつたんですね。」 つとルミアが言った。

「言つた内容は、自分の名前についてだけ。まだ怪しい5人の話をし

ない。まだ正しいと決まった分けではないし、かえつて混乱するので、自分の名前だけ話した。

「じゃ、これからティオさんって呼べばいいんですね」

「ああ、頼む。あと、HILLIAR達やガーディアンズの連中には秘密にしてくれないか?」

「わかりました。その代わり……」「ヒルニア。

「その代わり?」「ヒト闘^{ヒトク}ヘティオ。

「何か奢つて下さ!」「

「ヒルニアが言^{ヒルニア}つ。

「奢るだけで、いいのか?」「ヒト笑いながらティオが言^{ヒルニア}つ。

「はい、もちろん高いのを食べますよ。」「ヒト答えたルニア。

「秘密にしてくれるなら、それぐらい構わない。」「ヒト言^{ヒルニア}フルーク。

「ヒトブウ、カジノシティー

「ヒトでルニア?」「ティオがルニアに質問する。

「なんですか？」

「さつきも言つたけど、何で、君がここに？」どうやら、会つたときの話のようだ。

「ああ、それですか？実は他の任務で来てたんです。」

「他の任務？」

「カジノで悪質な手を使い、メセタを儲けてる犯人を捕まえに来たんです。犯人を捕まえた後に、あなたにあつたんです」

「そうだつたんだ。」

「ルー・・・ディオさんは何で、ここに？」ルークつて言いかけた、ルミア。

「・・・船を間違えた」

「えつ？船を？」

「ああ、」

「ふつふつふ、」つとルミアが笑う。

「な、何がおかしい？」
ディオも笑いながら聞く

「あなたもそんなミスをするんだなって」

「俺も、1人の人間だよ。失敗したりする」

「…………リトルウイニングを抜け出したのは」 つと少し小さめな声で聞くルミア。

「…………まあ、俺も、わからない。」

「…………」

「ティオさん…………」

「何だ？」

「いなくならないで下さい」（小声）

「えつ？」

「何でもありません。それでは、失礼します」

「ああ、」

つとルミアは走つて立ち去つていつた。先に行かせたガーディアンズを待たせているのだろう。

「さあ、俺も、行くか。」つと「トイオモ」の場を離れた。

「？？？？」

？「・・・・・」

？「・・・・・」

？2「君たちその辺にしなよ。」

？4「そ、そうシスよ。今ははもめてる場合じゃないシスよ。」

？「・・・・・」

？3「ふん、今日は勘弁してやる」

？「今、戦つても、いいんだが？」

？3「面白い、相手になつてやる」

？5「よさねえか、お前ひ。喧嘩なうどこかいいつてやれ

？2「だから、今はもめてる場合じゃないつて。」

？4「みんな、仲良くなっシスよ」

? 「・・・」

? 3 「・・・・・」

? 4 「さあ、握手ツスよ、握手。」

? 3 「・・・・・」

トコトコ

? 2 「あ、ひょっと待つてよ」

? 4 「何で、仲良くできないツスかね」

? 5 「さあな。」

? 「（人形め、俺の考えた計画をバカにしやがって）」

? 4 「何やつてるんツスか？ 置いていくツスよ

? 「（まいい。あの馬鹿を殺して、違うやつを呼ぶか。どうせ、代わりは、たくさんある。）」

? 「バリン、ちょっといいか。」

バリン（?3）「なんだよ」

? 「お前ら、先にいってくれ」

? 2 「わかりました」

? 4 「早く来てください」とスよ」

バリン「なんだよ、用つ・・・・・」

グサツ

バリン「・・・・・」

バシユツ

バリン「・・・・・き、きさ・・・・・」

グサツ、バシユツ、グサツ、バシユツ、グサツ

バリン「や・・・・め」

? 「消える。」

ビ――――ン――

? 「・・・・・」

？「（所詮、人形は人形か。）」

ピッ、ピッ、ピッ

？「俺だ、バリンが死んだ。早急に代わりをよこせ。今度はゴリを寄越すな。きちんとしたやつをよこせ。じゃな。」

？「やつ（人形）の代わりが来るまで、どうしようかな？・・・ルークとやらと、遊ぶか。いずれ戦うはめに合つ。先に殺しておくか。奴らが奴ルクを失えば、二つのもんだ。」

ゾクツ、

「――な、なんだ、この感覚は・・・」

（一種族部隊・拠点）

「ディオの兄貴に俺達の事を？」

『嘘、偽りなく、正直に話したよ。彼も疑わなかつたよ。』

「そりゃ、それは、よかつた。話がわかる奴で。」

『本当に、よかつたよ。せつぱり真実を言つのは気持ちいいね』

「兄貴は真実がほとんどだし、嘘はあまり言わないもんな。」

『・・・・嘘は、そのうちバレ、その人からみんな離れていく。嘘はたつた一つで絆を切らしてしまう可能性があるんだ・・・』

「兄貴？」

『（テイオ君、偽りは・・・・ほどほどに頼むよ・・・・。君が必要なのは、僕達じゃない。リトルウイングの皆なんだよ）』

第一話・嘘と眞実3（後書き）

第一話・嘘と眞実終了です。

謎の5人の1人が死にましたね。今は4人ですが、また5人になります。

誤字、脱字がありましたら、教えて下さい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4736z/>

ファンタシースターポータブル2i～異世界の5人～

2011年12月27日21時52分発行